

芝生という保育環境に関する一考察

—附属幼稚園における「保育内容総論」の視点からの観察—

前川 頼子, 森 みどり, 古橋紗人子

A Study of the Grass Garden in Child Environment:
With the Observation of Practices at College Kindergarten
from a Viewpoint of “*Childcare Contents Theory*”

Yoriko MAEGAWA, Midori MORI, Satoko FURUHASHI

キーワード：「保育内容総論」・「保育者論」・「環境」

1. はじめに

大学の附属幼稚園は、大学と隣接する学園の敷地内に位置し、幼児教育保育学科の学生にとっては、「教育実習」をはじめ、「教職実践演習」「保育内容総論」「保育者論」「幼児体育」等の科目に関する学習を有機的に学ぶ教育現場となっている。その附属幼稚園の園長及び大学の実習や関連科目の担当教員が新体制となったことから、附属幼稚園と大学との新たな連携のあり方を模索するため、園庭の芝生化を学生指導という観点から研究することとする。

附属幼稚園では、平成25（2013）年度より、土の園庭を芝生の園庭に変える園庭の「芝生化」に取り組んでいる。「芝生化」に関しては、平成22（2010）年に商標登録された鳥取方式®（NPO法人グリーンスポーツ鳥取）や平成16（2004）年に「大阪みどりの基金」の一環として行われた大阪府下の公立小学校の芝生化推進事業はマスコミにも取り上げられる等、社会的にも関心が高まっている。大阪府のホームページ¹⁾では、芝生化推進事業（平成21～24年度）により182校（18.0%）の学校が芝生化され、これ以前からの学校を入れると282校（27.9%）が芝生化されたことになり、全国平均7.60%（文部科学省調査平成24年5月1日現在）よりも大きく上回り、大阪府下の小学校の芝生化は全国でもトップクラスと掲載されている。筆者（古橋）が2、3年前に府下の公立幼稚園や民間保育所を実習訪問した際にも両園とも芝生化されていた。大阪府では小学校同様、公私立の幼稚園や保育所にも補助金事業として園庭の芝生化が推進されているのである。

他方、滋賀県下においても公私立の幼稚園や保育所では「芝生化」への取り組みが地道に行われている。しかし、その取り組み方は様々である。たとえば、私立のA保育園では保護者が中心となって敷設（芝張り）を行い、維持管理の主体も保護者であった。とはいえ、多くの園は附

属幼稚園のように園長のリーダーシップの下、教職員が「飼育」（『附属幼稚園の園だより』より）している園が多い。

2. 研究目的

本研究では、附属幼稚園の園庭を芝生化したことで子どもの活動がどのように変化したのかについて学生の観察を通して考察し、園庭の芝生化に関する社会的、教育的意義を明らかにしたい。また、本研究の共同研究者三名の担当科目である「保育内容総論」（前川、古橋）や「保育者論」（森、古橋）の学習と附属幼稚園の実習が有機的に結びつくよう、学生の実習観察を通してその学生指導のあり方も模索してみたい。

3. 芝生化園庭を考察する視点

本節では、芝生化園庭を考察する視点として、ゴッフマンのドラマトゥルギー（演出論）の見方を挙げておきたい。筆者（森）はすでに、他の論文において、日独の小学校の教室という「舞台 stage（ゴッフマン）」で行われる子どもらのパフォーマンスを、ゴッフマンの「ドラマトゥルギー（演出論）」の視点から分析している²⁾。ゴッフマンによれば、「大道具」や「小道具」を含めた「舞台装置 setting（ゴッフマン）」は人間の行為になんらかの影響を与えることが多いというが、調査対象である子どももまた、教室という「舞台」に入ること、「児童」という「役割期待（通常、児童に求められる振る舞い）」にそくした自己を呈示していた。

そもそも「舞台」とは、ゴッフマンの「局域 region」という概念のことである。region とは、「知覚にとって仕切りになるもので、ある程度区画されている場所」と定義される³⁾。局域という日本語は、あまりなじみがないためここでは「舞台」という概念を用いるが、一部、芝生化された園庭もまた、（仕切る物があるわけではないが）土の部分から「区画された場所」とであると言える。ゴッフマンによれば、俳優である「チーム」は、パフォーマンスを観る人（「オーディエンス」）のいる「表舞台」では、その場所に適した振る舞いをするが、「オーディエンス」がいない「舞台裏」に入ると、寛いだ振る舞いをするようになるという。いずれにせよ、このような形で人は役割としての自我を形成していく。

ベルリンの小学校の教室に見られる子どもの儀礼のパフォーマンスを分析したヴルフの例を挙げれば、朝、登校した子どもは、廊下から教室への敷居を乗り越える際、それまでの「子どもらしい」振る舞いから、「児童らしい」振る舞いをするようになる。ヴルフは、こうした振る舞いの反復により、子どもが毎朝児童の役割を身につけていくプロセスを「小さな通過儀礼」という概念で捉える。さらにヴルフは、子どもが登校の際に、教室の後ろのロッカーの方に移動し、自分のジャンパーや帽子を脱ぐという「授業に臨む姿勢」や、子どもが自分の椅子に座り、玩具やお菓子を鞆にしまい、勉強道具を机の上に出すという「授業向けの振る舞い」も例として挙げて

いる⁴⁾。こうした行為が繰り返されるなかで、教室において「児童」としてのアイデンティティは強固なものとなっていくのである。こうした視点は、芝生化園庭の考察に妥当するだろうか。以下では、附属幼稚園・小野園長へのインタビュー調査や参与観察から得られた例を挙げ、この視点の有効性を検討したい。ここでは、園庭を芝生化したことで、子どものパフォーマンスが変化した三つの具体例を取り上げる。まず、園庭が芝生となったことで、転んでも痛くないことに気づき始めた子どもたちが、おもいきって走るようになり、子どもたちの身体の重心が下の方になる傾向が見られ、子どもが全体的に速く走れるようになったという。(また、滋賀県のほかの幼稚園と比べても、附属幼稚園の園児は、園庭芝生化以降、運動測定の走るタイムが速くなっているという。)このことは、芝生という舞台上で子どもが「転んでも痛くない身体」を形成すること、また芝生で転ぶというパフォーマンスを繰り返す度に、こうした身体が強固なものとなっていくことを意味する。さらに、他の子どももまた模倣(ミメシス)を通じて、芝生で転び、「転んでも痛くない身体」を形成する。こうして、この集団は拡大してゆく。以上から、芝生の舞台の上で、子どもたちのパフォーマンスがより積極的なもの、アクティブなものとなったことが理解できる。

次に、小野園長によれば、園庭が芝生となったことで、虫が多くなり、その虫を用いたパフォーマンスが見られるようになったという。虫を「登場人物」として捉えれば、子どもは園庭という舞台を得たことで、新たな「登場人物」と出会うことが可能となった。筆者が参与観察に入った際、附属幼稚園にはトンボが観察されたが、トンボという登場人物を捕まえる子どもとの間に相互行為が繰り広げられ、さらにそれを観る「オーディエンス」の子ども集団が観察された。以上のことから、芝生化園庭は、新たな登場人物を招く場であり、また、子どもたちの集団形成を促す場であるといえる。そもそも芝生化園庭は、園児が芝を植える作業を手伝うことにより仕上がったものであるが、土の場合と異なり、芝には一定期間、休ませなければならない時期がある。園長によれば、「芝さんお休みしているから、踏まないでね」という教員の指示を厳格に守り、絶対に柵内に立ち入らない園児がほとんどであるという。「芝」ではなく「芝さん」という擬人化された形で教員の言葉に登場することからも分かるように、ここでは、芝はもはや単なる「舞台」としてではなく、一つの「キャラクター」として捉えられている。生きた「キャラクター」であるからこそ、「命を育むための忍耐力」が必要であるということを、園児は身体的に学んでいくのである。以上のように考えれば、芝生化園庭という舞台は、一方で子どものパフォーマンスをより「アクティブに」し、そこでの集団形成に寄与する。他方で、砂と芝生が決定的に異なるのは、後者が「生きている」ということを、園児が実感しやすいという点にある。換言すれば、芝生化園庭は、生きた舞台として、子どもが「その成長を期待する」場であるといえるのではなかろうか。芝生は、一方で子どもたちのダイナミックな遊びや集団形成を促し(動的)、他方で子どもに静かに見守られる(静的)。芝生化園庭にはこうしたダイナミズムが働いているように思

われる。以上のような形で、ゴッフマンの舞台という概念により、芝生化園庭を分析することが可能であると思われる。今後、より本格的に調査を進める必要がある。

4. 「保育内容総論」の視点

「保育内容総論」の授業では、幼稚園教育要領及び保育所保育指針の要旨に沿い、保育内容の理念の成立と変遷を理解するとともに、単に保育内容の各「領域」を統合するだけでなく現在の保育の全体構想の中で保育内容を実践に即して総合的に捉えることを目指している。

(1) 5領域の内容及びねらい

幼稚園教育要領の「第1章 総則、第1 幼稚園教育の基本」において「幼稚園教育は、学校教育法第22条に規定する目的を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする」と示され⁵⁾、保育内容については「第2章 ねらい及び内容」において次のような5領域ごとにその内容とねらいが明記されている。

「健康」①明るくのびのびと行動し、充実感を味わう。

②自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。

③健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身につける。

「人間関係」①幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。

②進んで身近な人とかかわり、愛情や信頼感をもつ。

③社会生活における望ましい習慣や態度を身につける。

「環境」①身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中でさまざまな事象に興味や関心をもつ。

②身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。

③身近な事象を見たり考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

「言語」①自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。

②人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。

③日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友だちと心を通わせる。

「表現」①いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。

②感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。

③生活の中でイメージを豊かにし、さまざまな表現を楽しむ。

(2) 「幼稚園教育要領」と「保育所保育指針」

「幼稚園教育要領」における5領域の内容は、幼児が環境にかかわって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものであることに留意しなければならない。他方、「保育所保育指針」の「第3章 保育の内容」でも、「『教育』とは、子どもが健やかに成長し、その活動がより豊かに展開されるための発達の援助であり、『健康』『人間関係』『環境』『言葉』及び『表現』の5領域並びに養護に関する『生命の保持』及び『情緒の安定』に関わる保育の内容は、子どもの生活や遊びを通して相互に関連を持ちながら、総合的に展開されるものである」と定義づけられている。とりわけ、3歳児以上に関しては、保育士の援助を通して子どもが身につけることが望まれる事項について幼稚園と同じ5領域が保育内容として設けられている。そこで「保育内容総論」の授業ではこれら5領域を中心とした包括的・総合的な保育という視点から、学生に対して保育内容に関する理念と実践を教えている。また、小中学校などにおける「教科」との違いを明確にするため、時間で区切って指導したり活動したりするものではない「領域」の特性を理解する視点も示している。

さらに、「保育所保育指針」における「第1章 総則 3 保育の原理 (3) 保育の環境」では、「保育所は、こうした人、物、場などの環境が相互に関連し合い、子どもの生活が豊かなものとなるよう、計画的に環境を構成し、工夫して保育しなければならない」とある。こうした環境作りについては、幼稚園教育要領の保育内容「環境」においても「周囲の様々な環境に好奇心や探求心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」とあるように、その重要性が指摘されているところである。そこで「保育内容総論」の授業では、子どもが身の回りのさまざまな環境に興味や好奇心をもって関わりながら遊びや生活に必要な力を獲得していくには、子どもがどのように環境にかかわって活動を生み出していくのかを考えること、さらに子どもが主体的に活動するための環境を作り出していくことの重要性に力点を置いた指導を行っている。

5. 「保育者論」とのコラボレーション

1回生前期開講の「保育内容総論」では附属幼稚園を見学する機会を設けているが、その目的は入学間もない学生が保育の現場に身を置く体験をすることにある。一方、2回生後期開講の「保育者論」においても附属幼稚園を見学する機会があるが、その目的は保育環境と保育者の言動から保育のねらいを読み取ることにある。そこで「保育内容総論」担当の前川は、「保育者論」での附属幼稚園を見学する授業にも参加し、保育の場面において5領域が総合的に取り込まれていることに学生が気づくよう働きかけるなど、「保育内容総論」の視点から保育のねらいを読み解く試みをこれまで行ってきた。

さらに今年度からは、新たな教育環境となった「芝生園庭」における遊びと保育者のかかわりについて「環境と保育」と題して事前に学生へ講義を行い、学生が想定できる「芝生園庭」での

芝生という保育環境に関する一考察

遊びに関する模擬指導案の作成を試みた。表1はその時に学生が想定した遊びに関して集計を行ったものである。虫や蝶の名前を具体的に挙げたり、花の名前を書いたりする学生もいたが、集計においては「芝生園庭」における遊びを3つにまとめ、芝生園庭を想定した遊びに関する学生の意識について以下のような考察を行った。考察においては、「保育者論」の中で学生同士が自分の幼児期の遊びや芝生体験などの自然環境に関する話し合いの内容を参考にした。

表1 芝生園庭を想定する遊びに対する意識 対象：幼教1回生136名

	項目	分類	%
①	寝転ぶ, 芝を手や裸足で触れる	感触を楽しむ	44%
②	虫探し, お草花探し, 花の匂いをかぐ	観察する	41%
③	鬼ごっこ, しっぽ取り, ボール遊び	集団遊び	14%

(1) 芝生園庭を想定する遊び

1) 感触を楽しむ遊び

学生が芝生園庭において最も多く想定した遊びは分類①の「感触を楽しむ」(44%)であった。このように高い割合となった理由の一つに、事前の話し合いにおいて、学生自身が子どもと一緒に裸足で芝生の感触を味わえれば「気持ちいいだろうな…」といった願望の言葉が飛び交っていたことを挙げるができるだろう。更に学生たちの中には、柔らかな芝生の感触を心地よく味わった園児は気持ちよさから安心感を抱き、固い土の上より活動的な遊びをするのではないかと予想する者もいた。その結果、分類③の「集団遊び」(14%)に関する意識が高くなったと考えられる。実際、事前の話し合いの中では「サッカー」「ドッジボール」など具体的な遊び名も聞かれた。

2) 観察する

分類②の虫探しや草花探しといった「観察する」(41%)という遊びが「感触を楽しむ」という遊びに次いで多く想定された芝生園庭における遊びであった。その差は3%であり、ほぼ同等と考えてよいであろう。その要因の1つとして、次のような授業内容に関する事柄を挙げるができるかもしれない。

1回生前期において、学生は「保育内容総論」の授業とともに「保育内容環境」という授業を履修する。「保育内容環境」という授業では、「幼児自然体験型環境学習検討委員会」⁶⁾の委員でもある体験型環境保育の講師が教鞭を執り、本学の恵まれた自然環境下において自然体験型環境保育プログラムに添った内容を学生たちに教えている。具体的には、学生たちが名神高速道路沿いにあたる本学の裏山に入って植物や石などを採取したり自然観察をしたりすることを通して、自然環境下における動植物への接し方や安全教育について学んでいる。こうした学習を通して、自然観察に対する学生の意識が育まれたと考えることができるだろう。

3) 学生の学習の場としての芝生園庭

前述した本学の敷地内にある裏山は、竹林や雑木林、石、砂などの自然物はじめ、昆虫類にも恵まれている。鳥類やイタチ、夫婦と思われるタヌキたち、ヘビ（マムシ以外）には、筆者（古橋）も裏山で何度もお目にかかっている。また、教室にスズメやハチなどが侵入したり、廊下や階段などではムカデやゴキブリなどがまれに出現したりもする。このような経験は学生の学習において付随的事柄のように思われがちであるが、筆者はこれらを学生が保育者になった時取るべき態度を示すまたとない機会と考えている。すなわち、教員にその知識があり、さらにそれを教えることが必要性であると感じているならば、学生の学習における突発的な事柄は付随的事柄ではなくなるのではないだろうか。たとえば、鳥や虫などが教室に入ってきた時には、窓の開閉のタイミングや子どもたちを落ち着かせるための対処法など保育者として適切な言動を指導することができる。保育現場で発生する突発的な事項、特に鳥や虫などの珍客に対する対処方法は、その時間的なタイミングや距離感などを数値として示しても学生にとってはなかなか理解しづらく、机上の学習では困難が多い。また、そうした学習は自然環境に大きく左右される。したがって、附属幼稚園における芝生園庭という自然環境での学習は学生の保育環境に関する学習にも結びつくと考えられるのである。

6. 学生との観察からの考察

(1) 写真から見る園児の表情

分類②の「観察する」で想定されている遊びとは、子どもが虫探しをしたり木の葉の葉脈を透かして見たり、花に鼻を近づけ匂いを嗅いだり、またそれらを図鑑で調べたりすることなどである。このような遊びにおける子どもの意欲・心情・態度を保育者が観察することによって、環境を通した子どもの新たな側面の発見をすることが可能となるのではないだろうか。すなわち、子どもの発達に関する専門的知識を基に子どもの育ちを見通し、その成長・発達を援助するために一人ひとりの子どもをよく見ること＝理解すること、こうした関わりの技術こそが子どもをよりよく育てていくための保育者の専門性ではないだろうか。（写真1）

また、分類①の「感触を楽しむ」で想定されている遊びにおいては、裸足になって芝生の上を思いっきり走っても足の裏は痛くないことを子どもが感覚的に体感するようになるだろう。また、地面すれすれのところで体のバランスを取ったり、素早く体を動かしたりするなど、子どもが多様な動きを身に付けることもできるだろう。まさに芝生の上は子どもの運動感覚づくりにとって最適の教育環境であり、体力アップにもつながると考えられるのである。（写真2）

さらに分類③の「集団遊び」においては、子どもが鬼ごっこをしたりしっぽ取りをしたりボール遊びをしたりする中で、走ったりすべったり転んだりするといった子どもの姿が想定されている。実際、土の園庭では日々子どもたちの怪我、特に転倒による擦り傷が心配だが、芝生の上

芝生という保育環境に関する一考察

では芝生が天然のクッションになり衝撃が緩和され、そうした怪我の心配も少なくなる。(写真3) また、附属幼稚園の小野園長によれば、「芝生化」以降、転んでも痛くないことを体感した園児は歩幅が広くなり、股関節が柔らかくなったという。さらに子どもの怪我の減少は、怪我を気にせずのびのびと遊ぶ子どもの姿として現れてきているとのことである。(写真4)

加えて、芝生園庭の特徴として線を引いて位置を示すためにミニマーカーが導入されるということも挙げることができる。土の園庭では石灰を使ってラインを引くこともできるが、芝生の園庭では芝生の管理という側面から石灰を使うことは好ましくない。そこで色別のミニマーカーがしばしば導入されることになるが、それによって多様なラインや囲みを示すこともでき、その利点を生かした保育の展開を考えることもできる。たとえば、ミニマーカーを利用した子どものドッジボールを観察することで学生たちは環境構成の工夫などを考えることができるようになる(写真5)。

(2) 演習授業への意識

「保育内容総論」は1回生前期の演習科目の授業である。シラバスの授業計画では、①保育所保育指針と幼稚園教育要領の理解、②保育内容の歴史の変遷と今日的課題、③発達過程と保育内容、④保育所の1日、⑤幼稚園の1日、⑥幼保一体型施設の1日、⑦～⑬では0歳児から5歳児までの保育内容5領域のねらいと内容の理解、⑭多様な保育内容、⑮今後の課題と示し、全体を通して体験型授業を心掛けている。その特徴の1つが附属幼稚園での見学授業である。そこで以下では、学生と見学した附属幼稚園における「芝生園庭」での保育を中心に、保育の展開とそれに関わる学生指導について著者(前川)の考察を述べることとする。附属幼稚園での見学では、実際の保育場面における子どもや保育者の様子をみながら保育内容全般への理解を深めることを目的に、学生たちが具体的な保育の営みや保育者と子どものかかわりを保育実践の場で観察する。その際、子どもが自発的・意欲的に環境にかかわっていくことを大切にするという意義を十分に理解するため、幼児が主体的に取り組む生活を展開できるような幼児一人ひとりの特性に応じたふさわしい生活のために「どのように遊ばせるか」ではなく「どのような環境を準備すればよいのか」という視点をもって保育実践を観察するよう指導をした。(写真7) というのも、保育所保育指針では「保育の目標」を達成するために保育者が留意することとして「子どもが自発的、意欲的に関われるような環境を構成し、子どもの主体的な活動や子ども相互の関わりを大切にすること」(第1章3(2)一オ)と記され、幼稚園教育要領では「幼稚園教育は、幼児自ら意欲をもって環境とかかわることにより作り出される具体的な活動を通してその目標の達成を図るものである。」(第3章第1)と記されているように、保育の場面においては環境を通して保育を行うことが重視されているからである。

たとえば、子どもの幼稚園生活には遊びを中心とする部分と生活習慣(食事、衣服の着脱や片

づけ、あいさつなど)にかかわる部分がある。これらすべての活動が子どもの興味や関心そして生活リズムに沿いながら自然な流れの中で展開され、園が楽しいところと感じられるように様々な工夫がなされている。したがって学生たちには、子どもが思わずかかわってみたいと思える空間が確保されていることや、遊んでみたい、さわってみたい、やってみたいなど子ども自らが意欲的に環境にかかわれるように環境と子どものかかわりを方向づけていく役割が保育者にあることを認識させたい。そのため、幼稚園の環境は子どもに経験させたい活動が十分に展開されるような工夫がなされているかを学生たちに観察させた。(写真8)

また、たんに見学して終わるのではなく、学生自身が幼稚園での遊びの環境設定状況から何を感じたのかをその後の授業で学生同士が意見を交わし、さらに教員から環境構成の役割や意図を解説することによって、学生自身が自らの実感を伴いながら環境構成の役割や意図について理解を深めることも重要であると考え。したがって、附属幼稚園での見学においては次のような振り返りを含めた全体的な学生指導を行った。

- ① 環境の設定場面を見て記録する
- ② それぞれの見方についてグループに分かれてディスカッションする
- ③ 観察した環境から予想される子どもの活動について話し合う
- ④ グループ毎に話し合った内容を発表する

以上のような指導を通して、学生たちは子どもたちの姿に少し圧倒されながらも、現場の雰囲気を感じることができたのではないだろうか。また、子どもが夢中になって遊んでいる姿を見て、保育者が準備する環境の大切さを感じたという感想も学生から聞かれた。さらに、観察した内容を基にグループ毎に話し合いをしたところ、自分が観察できていなかった場面も話し合いに出てきて新しい発見ができたという感想も多かった。くわえて、授業の中で3歳児・4歳児・5歳児の発達過程を理解した上で実際の保育現場を観察することによって、その環境設定の違いや保育者のかかわり方などにも触れることができた。

しかし、こうした学生指導の取り組みは始めたばかりであり、「環境を通して行う保育」についての考え方の理解等いろいろと課題もあった。学生自身が保育場面から情報を取り出せる(観察できる)感性や視点を広げられるような授業の取り組みを今後は探っていきたい。

7. おわりに

園児との敷設段階を知らなかった筆者(古橋)は、夏のある日、研究室からジャン・ジオンの「木を植えた人」を見ている幻想にかられた。幻想は毎日続き、幻想ではなく小野園長の芝生化への作業をコツコツする姿と知ったが、この時の感動が本研究のスタートであった。本研究は、平成26(2014)年5月、大阪保育総合大学に於いて開催された、日本保育学会第67回大会におい

芝生という保育環境に関する一考察

て、森、前川、古橋の3名で連名発表したものである。研究に際しては、森が教育哲学の視点から遊びの舞台としての「芝生園庭」を考察し、前川が学生の意識調査を通して「保育内容総論」の視点から附属幼稚園での学生の学びを考察し、古橋が森と前川のパイプ役を担った。

保育環境を芝生化することは、わが国のみならず地球規模での自然破壊による地球温暖化現象が危惧されるなか社会的に意義深いことと考えられる。また、附属幼稚園の園長へのインタビューによれば、園庭の芝生化以降、園児の運動測定のコストはよくなったという。さらに、森の考察からは、芝生化された園庭のもつ教育的ダイナミズムが明らかになったといえる。なお、附属幼稚園における学生の有機的な学習効果とその指導のあり方については、今後の調査による継続的課題と考えている。

ところで、1931（昭和6）年、東京女子高等師範学校附属幼稚園（現お茶の水幼稚園）の主事を命じられた倉橋惣三は、園丁になりきり、花壇はじめ園庭環境を重んじたことは有名である。その後、文部省から教育学の在外研究員として欧米へ派遣された倉橋は、「新保育」を求めて、欧米の幼稚園、保育所の他に、子どもの集まるところどこでも見てまわった。なかでも、アメリカでも一番盛んなシカゴの児童遊園には幼児の場があり、そこは芝生と砂場と浅いプールさらに日よけの下の低いベンチからなる、と記している。東京女子師範学校附属幼稚園の園庭（図1）には、芝生、花壇、池、幼児用島、山などがあるが、本学の附属幼稚園の園庭も芝生化の実現によりこれとほぼ同じ環境となったのである。園庭の芝生化により子どもへの保育だけでなく学生への指導がどのように変わるのか、今後も継続して研究をしていきたい。

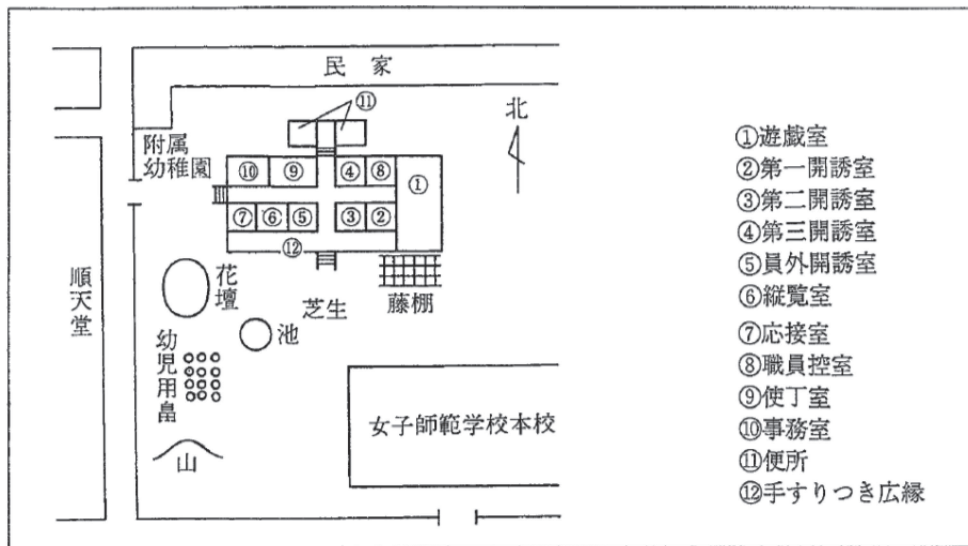


図1 東京女子師範学校附属幼稚園平面図（1876（明治9）年開園当時）

註

- 1) 「大阪府／芝生を敷いてみましょう」
(URL: <http://www.pref.osaka.lg.jp/midori/siba/sibawosiku.html>)
- 2) 森みどり『教室のドラマトゥルギー』, 北樹出版, 2014年。
- 3) アーヴィング・ゴッフマン『行為と演技』, 誠信書房, 1974年, 124 頁。
- 4) Christoph Wulf u. a. : das Soziale als Ritual, VS Verlag fuer Sozialwissenschaften, 2001.
- 5) 学校教育法 第三章 幼稚園 第二十二條「幼稚園は, 義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして, 幼児を保育し, 幼児の健やかな成長のために適切な環境を与えてその心身の発達を助長することを目的とする。」
- 6) 「幼児自然体験型環境学習検討委員会」は, 滋賀県琵琶湖環境部エコライフ推進課, 林務緑生課, 自然環境保全課, 児童家庭課, 学校教育課からなる滋賀県独自の幼児期の環境教育についての検討委員会。設置目的は, 滋賀県において, 幼児期における自然とのかかわりの体験を深めることを通じて, 自然の不思議さや美しさに対する感性を育み, 幼児の心身の健全な発育を図るための環境学習について検討する。

参考文献

- ・ 森みどり『教室のドラマトゥルギー』北樹出版, 2014年。
- ・ アーヴィング・ゴッフマン, 石黒毅訳『行為と演技』誠信書房, 1974年。
- ・ Christoph Wulf u. a. : das Soziale als Ritual, VS Verlag fuer Sozialwissenschaften, 2001.
- ・ 上野恭裕『保育内容総論』保育出版, 2008年。
- ・ 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館, 2009年。
- ・ 厚生労働省『保育所保育指針解説書』フレーベル館, 2009年。
- ・ 神田信生『子どもの生活・環境・遊びに向き合う』萌文書林, 2013年。
- ・ 待井和江編『保育原理 第6版』ミネルヴァ書房, 2006年。
- ・ 倉橋惣三『子供讃歌 第7版』フレーベル新書, 1990年。
- ・ ジャン・ジオン『氣を植えた人』原みち子訳, こぐま社, 1989年。
- ・ 森上史朗, 柏女靈峰編著『保育用語辞典 第4版』ミネルヴァ書房, 2008年。

芝生という保育環境に関する一考察



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6



写真7



写真8



写真9



写真10